

●「八月の群れ」 (兵庫県) 69号

今季は、関西の同人雑誌を多く読んだ。最近の関西の同人誌には活気が感じられる。これは大阪文学学校の卒業生たちが育っているためでもあるように思える。大阪文学学校の影響下にある書き手は全国にも散らばっていて、隠然としてはいるが確かな力を発揮している。一つの文学学校の継続の功績は大きく、敬意を表したい。

この「八月の群れ」が大阪文学学校と関係があるかはわからないが、兵庫の文芸活動の一角を担う力強さがあり、鍛錬を経てきている技量のある作家がいる。

葉山ほずみ氏の「雨宿り」は、「最期の願いほど断りにくいものはない」といういい書き出しから始まって、一つの世界を書き切っている。父親が自殺して、母親にも祖父にも見捨てられ、曾祖母によって育てられた十三歳の少年を、その曾祖母の死によって京香という主人公の独身女性に育てることになるストーリーで、珍しくはない人情ものという輪郭は取っているが、熟練した筆の庖丁捌きが見事で、湿り気を帯びない筆運びが、人間の生きる姿をくつきりと浮かび上がらせている。主人公の薬局経営も明確に

八月の群れ

大阪文学学校卒業生による同人誌

Vol.69

2019-11

描けているし、少年の、親のないことを気にしながら生きる過程で身に着けた躰や生活習慣も少年像として生動している。筆者の文章はひじょうに動きがよく、歯切れのいい省略によって前へ進む運動の陰に行為と性格がよく照らし出されていて、くつきりした輪郭を彫り出している。「言葉が足りないですか」/そう繰り返すと、香奈江はかけていた老眼鏡をずらして京香へ顔を向けた。「とか、「キッチンに立って朝食の準備をする背がまた少し延びた後ろ姿を見て、春休みのあいだに制服の裾直しに連れて行く日を見て、春休みの中ですばやく選んだ。」などの文は、行動と進行が的確に絡み合っていて、人間像を浮かび上がらせつつ、しかも関係が深まっていく過程を描出している。一見いっさいの湿度を除去したように見える抑制された筆運びは、その底に深い愛情のうねりを蓄積していて、それがクライマックス部分で激しく噴出する。「おじいさん、来てくださってあ

りがとうございます。僕の存在があなたたちをどれほど傷つけてきたか、理解しようとは思いません。だけど、あなたたちが僕を否定することをやめる必要もない。もう僕は否定されても大丈夫だから」。また自分たちの血縁の不運を主人公は言う。「なるわけないだろう。そんな負の連鎖は私で最後だ。きっちり断ち切っていて、それを受けて立ち上がるからこそ、その言葉は力強く胸を打つ。涙を覚えるような場面もあるのは、そのためだろう。優秀作。ただ、祖父、祖母、叔父、叔母、従兄弟、曾祖母など、内側から見た人間関係の言葉は、混乱して何がどうなっているのかよくわからない余計な複雑さを生んでいる。人の名前や年齢を添えるなどしてすつきり整えてほしい。

山咲真季氏も力のある書き手で、「近くて遠い声」には、左耳の違和感を、実家の事件と重ねて進行させる巧みがあり、その雰囲気は構造の深化を孕んで濃さを感じさせる。ただ、その両極が徹底しておらず、どちらも中途半端なまま浮いているのが、結合を弱めている。実家の事件は他人事のようにも映る。この事件の本質を見極めて掘り下げることが、自分の耳の違和感の根を明らかにするだろう。力は認めるが結実していない。準備優秀作。

●「mon」 (大阪府) 10号・11号・12号・13号・14号

この誌は最近注目を集めている誌で、「三田文学」や

「季刊文科」でもかなり取り上げられている。先日の全国同人雑誌会議の席で、三田文学の同人雑誌評の久村氏からも「評価が食い違う」という意見をもらったので、かなり前の号まで遡ってあらためてまとめて読んでみた。若い書き手が揃っていて、センスのよさの光る誌である。

「mon」も大阪文学学校の卒業生が中心になっている。「ゲスト制」というおもしろい編成を組んでいて、同人以外の書き手を招き載せて豊かにしている。そのゲストがまた同人に加わっていくという結果が良い効果を生んで、さらに刺激を生み、作品も洗練されていくことに繋がっている。

10号については、記念号で「モン」という音や漢字を入れたタイトルで皆で創作している。こういう企画自体がおもしろい上に、それに応えて、書き手が工夫を凝らして、それぞれにセンスのある作品を提出している。これだけでもかなりの才能を感じる。「聞こえる」(島田奈穂子)などもミステリー仕立てで、おもしろい。

11号の「襖の向こうに」(森本智子)は、介護の裏面の殺意をちりばめていて、心理のリアリズムを浮かび上がらせていた。親子関係には暖め合う力が普通だが、そうでない場合も少なくない。その狭間で揺れ動くのは自然だが、介護の領域で負の部分が出露することは否めない。その心理の彩を取り出してみせた点では成功している。今介護さ

れている母親が、以前祖母を殺そうとしたシーンは、フィクションの方法を大胆に使って、迫真力が増している。森本氏はゲスト参加でやはり大阪文学学校の出身。ただ、他のメンバーとは、少し毛色の異なるものを感じる。殺意の下にもっと親子とか血の繋がりとか生存とか、根底的な問いかけを深めることも可能かと思われ、そこまでいけば文学の斧の真の刃となるだろうが、それは欲張りかもしれない。推薦作である。

12号は「あまごいむし」（飯田未和）と「手の中の小鳥」（島田菜穂子）が、楽しめた。飯田未和氏は「mon」の主宰であり、エルマール文学賞も大阪女性文芸賞も受賞している実力者でもある。作品はルンロンという雨蛙を飼育していたり、動物カメラマンの写真展があつたり、現代の色彩が鮮やかで、快いトーンが流れているが、そのさわやかな風が、両刃の剣になっているところが難しい。文体はどこまでも軽く歯切れがよく、さらさらと読み進んでいく。文章の快さは、酪酊というふうな深いものではなく、あくまで炭酸飲料のさわやかさとして流れていく。気持ちのいいスピード感、そよ風感である。会話は受け答えの調子がよく、リズムカルである。立ち止まることをしない。しかし実質的な人間の存在になると希薄で、人影の模様が光のアクセサリーのように明滅して消えていく。「殺」というギャラリーの店長の死も、命の領域に降りてくること

なべてまりか」もその延長線上にあるものだ。この筆者は自閉的な空間を増幅装置にしてさらに快い幻想感覚を押し広げていく。流れのよさは機銃掃射のようなイメージや調子の繋がりがとなつて、読み手を巻き込んでいく。紡ぎの魔法にかけられたような吸引力をたしかに備えている。巻き込まれていく限りは快い。しかしよく読むと、「あまごいむし」と同じ一面を持っている。センスのいい言葉ややり取り、現代風の透明でプラスチックな感覚、その賑やかな鎖は、きれいに流れ過ぎていくものの、首から下には降りてこず、胸の底にはけっして届かない。羽毛の舞のように空中を踊り続けるだけだ。念のために「三田文学」新人賞の受賞作品「炭酸の向こう」を読んでみたが、同じだった。言葉は紡がれるためにあり、現実を捉えるためには遣われない。舞踏するためにあつて、現実や生きること向かい合うためには遣われない。もともと感動を拒否

作家集団「塊」プロ作家による 作品 添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします

懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ!
八寛正大（新潮新人賞）・大高雅博（群像新人長編小説賞）・都築隆広（文
学界新人賞）・五十嵐勉（群像新人長編小説賞／インターネット文芸新人賞）

「文芸思潮」の読者には特別料金で指導いたします。

あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい!!

詩		小説	
1 篇	A4用紙 2 枚以内 3000 円	1 篇	20 枚まで 7000 円
エッセイ			50 枚まで 10000 円
1 篇	5 枚以内 4000 円		100 枚まで 15000 円
	10 枚以内 5000 円		200 枚まで 20000 円

●ご希望の作家と面談指導も可能です。

●ご希望の方には案内所を送付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。

作家集団「塊」事務局

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

asiawave@qk9.so-net.ne.jp

なく、メロディーとして溶けていく。動物カメラマンに連れて行かれる樹海も死を匂わせるだけで、ギャラリーの展示のように残像のうちに装飾品のように外されていく。シヨウウィンドウの見映えがあれば十分なのだ。この流れのよさと読みやすさを可とるか、不可とするかだが、読み終わってあとに残るものがあるかどうかという一つの基準に立てば、物足りなさを覚えるのは否定しきれない。きれいな流れから漏れているものがあり、それが疑惑としてむしろ頭をもたげてくる。推薦作以上のレベルではある。このスタイルは他の書き手にも大きな影響力を持ち、これに似た作風の小説が「mon」を彩っている。これは自然な傾向で、だからより豊かになるとも言え、現実はこのスタイルをもっと発展させ、進化させている作品も見られる。望月なな氏の「透明な切り取り線」（11号）や「おし



したところに成立しているとも言える。それがバーチャル世代の陶酔であり、リアリティの喪失の新言語空間とも呼べるものかもしれないが、現実の力ははたしてそれにどう押し寄せてくるだろうか。苦しみや悩みや事故や敗北や運命の苛酷さは、それらの言葉で対峙できるだろうか。逆に言えばここには真の言葉の貧困が見られる。畢竟それは現実の貧困に繋がっていく。

ここまで隆盛になってしまっている一つの傾向を軌道修正するのは不可能に近い。それはそれで楽しんで一貫してしまえば、商業文芸誌にも取り上げられ、芥川賞にもなったりして現代的だともてはやされるのかもしれないが、真の文学からは遠ざかっていくだろう。

14号の島田奈穂子氏の「明日が来れば、さようなら」は、この作者のミステリー領域への広がりを感じられる作品で、設定とその匂いに可能性を感じる。ただ、オーストラリアにストーリーが飛んでしまったところに、拡散があり、ミステリーの閉鎖空間が破裂してしまった。本格的にミステリーに必要なものは何か、勉強して挑めば新領域への道が開けるかもしれない。

●「星座盤」(岡山県) 12号

新感覚の作品がいくつかあって、水無月つららの作品「ひかり透く」に注目した。文の運びに快適な律動があり、引きつけて読ませる力は大きなものがある。流れのよ



さ、感覚の新鮮さは、岡山の新勢力を感じさせた。多くの人に紹介したいだけの魅力はある。ただ、気がつくとも筆者は「mon」にもゲストとして参加していて、10号に「君は檸檬が読めない」を載せるなどして幅広い活動領域を有している。「mon」の作風と似ているところが、このような広い結びつきが近畿地方にあることに驚かされた。浅井梨恵子氏も両方の同人に名を連ねているので、やはり大阪文学学校の繋がりが、岡山まで帯をなしていることがわかる。軽いタッチ、清涼感、流れる文章は、共通した読みやすさで引き込んでいく。タイトルもセンスの良さが光る。この文章も一度は推薦作として紹介したい作品だ。「星座盤」の書き手は皆レベルが高く、どれも高水準の質を得ている。「mon」と同じような脚光を浴びていく可能性もある。

「レプリカドール」(荒井伊津)は変わった題材で、同性愛を大学での教授への売春に重ねて興味深く筋立てている。きわどい領域を扱いながら、奇妙に新鮮さも醸している不思議な小説だ。これはしかし、男性が主人公ではなく、女性主人公でも成り立つおもしろさを孕んでいる。予備選考では98点という高得点で上がってきた。準優秀作。

●「カム」(大阪府) 17号

この誌は特異な題材を持つ作品がいくつかあり、「いつかの光」(後藤高志)は発想がユニークでギクリとさせられる意外性を備えている。不倫をすると警察が逮捕に来るといふ設定はおもしろい。大胆な発想が、興味をそそる。ただ、文章に緊密なつながりが欠けていて、粗い印象を受

ける。不倫と逮捕の着地点が曖昧に溶けているのも、一法ではあるが、何か欲しい。準優秀作。他に「カケコミヒメ」(中山文子)や「君の好きな雲」(山本一男)など、現代の恋愛の形を描いていて、洗刺とした香りを覚える。不思議に生臭さがなく、セックスも乾いている。この誌も何か可能性を孕んでいて、関西新文学の風を運んでいるものの一つだろう。今季は関西の新興雑誌を中心に取り上げてみた。

優秀作

「雨宿り」 葉山ほずみ「八月の群れ」69号

推薦作

- 「襖の向こうに」 森本智子「mon」11号
- 「あまごいむし」 飯田未和「mon」12号
- 「ひかり透く」 水無月つらら「星座盤」12号
- 準優秀作
- 「近くて遠い声」 山咲真季「八月の群れ」69号
- 「手の中の小鳥」 島田菜穂子「mon」12号
- 「レプリカドール」 荒井伊津「星座盤」12号
- 「いつかの光」 後藤高志「カム」17号

